

科目名	言語教育学特講	担当者	オオカワ ヒデアキ 大川 英明	期間	通年	単位数	4
-----	---------	-----	--------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>本講座では第二言語習得研究における語用論と中間言語に重点を置いた研究成果についての理解を深め、更に応用する能力や考察する能力を養うことを目的とする。中間言語語用論や異文化間語用論の研究は外国語の指導に直接関連のある多くのテーマを扱っているものの、研究結果が必ずしも外国語学教育に組み入れられてはいない。この乖離を縮めるための教材について考えることにより、語用論や中間言語の枠組みからの外国語教育や異文化理解・教育のための応用力を身につけることを目的とする。さらに、自ら論文を探し、理解し、批判する力を養成する。同時に、レポート作成を通して研究者としての倫理観を身につける。</p> <p>以上の目的を達成することにより、豊かな知識・教養に基づく高い倫理観を涵養するとともに、論理的・批判的思考能力をはじめ、問題発見・解決力、挑戦力、省察力を身に付けることを目指す。 【日本大学教育憲章ルーブリック：A-2:4, A-3:4, A-4:4, A-5:4, A-8:4】</p>		
到達目標	<p>【一般目標 (GIO)】 語用論的指導や学習に関する基礎知識を理解し、言語と文化の関連事項を含め、語用論的な指導に関する中心的な概念を学び、活用する能力を修得する。</p> <p>【行動目標 (SBOs)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・語用論の基礎的な概念を理解し、外国語学習の教材分析、改善案が説明できる。</li> <li>・外国語の教科書を補うための一手段としての語用論的指導に応用できる。</li> <li>・実際の論文を読むことにより、分析方法や論文の書き方を理解する。</li> </ul>		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・manaba folio を使ったインタラクティブな添削指導を受ける。</li> <li>・図書館やインターネット、等を利用し、研究論文を選び、自主研究に基づき、レポートを作成する。</li> <li>・日本語または英語の教科書等を自ら選択し、その分析を行う。</li> </ul> <p>【学修方略 (LS)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指定教材を理解した上で、レポートを作成することにより、理解、分析し、論考を表現する。</li> <li>・指定教材を理解した上で、実際の外国語の教科書分析を行い、改善点を提案する。</li> <li>・関連する論文を読み、論文の書き方、分析の仕方を学び、さらに論文を批判的に分析する。</li> </ul> <p>【学習時間】</p> <p>レポート課題1 つにつき、完成までに以下を目安に最低 45 時間の学修時間を要するものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材の学修、論文選択、分析すべき外国語教材選択：20 時間</li> <li>・レポート執筆：15 時間</li> <li>・レポート推敲と最終稿の完成：10 時間</li> </ul>		
スケジュール	<p>&lt;前期&gt; レポート課題1 締切： 6月15日(初稿)・前期締切日(最終稿) レポート課題2 締切： 8月31日(初稿)・前期締切日(最終稿)</p> <p>&lt;後期&gt; レポート課題1 締切： 10月31日(初稿)・後期締切日(最終稿) レポート課題2 締切： 12月20日(初稿)・後期締切日(最終稿)</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	1) 教材・論文の理解度 2) 分析力 3) 論理的展開 4) 論文の書き方 前期レポート課題1, 2と後期レポート課題1は最終稿で評価する。 後期レポート課題2は最終試験として初稿で評価する。
	観察記録	20%	1) レポートの提出期限の厳守 2) レポート添削への対応等
履修者への要望	<p>①大学レベルの言語学を履修しているか、またはレポートを書き始めるまでにそのレベルの知識を得ておくことを前提とする。特に、音声学、音韻論、語彙論、統語論、社会言語学等の基礎的な知識があること。例として次のような書籍の内容を理解していること：斎藤純男(著)『言語学入門』(三省堂)、中島平三・外池滋生(著)『言語学への招待』(大修館書店)、瀬田幸人、他(編・著)『入門 ことばの世界』(大修館書店)</p> <p>②第1回目のレポートの準備を始める前に<u>担当教員にメールを送り、レポートの書式などの情報を得ること。</u>(ookawa.hideaki@nihon-u.ac.jp)</p> <p>③研究論文を選択する際に、選択が許容範囲かどうか確信がない場合には、教員に相談すること。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 石原 紀子【編著】・コーエン, アンドリュー・D.【著】 教材名： 『多文化理解の語学教育—語用論的指導への招待』（研究社, 2015） ISBN:978-4-32-737738-0 3,500 円+税
	本書は語学教育における語用論の理論と実践を結びつける試みを目指している。多文化間コミュニケーションに必要な能力として語用論の能力があり、語学教育でもその重要性が唱えられている。本書は語用論や第二言語習得理論の紹介にとどまらず、理論を言語指導の実践に取り入れる具体的な指導法を提案している。
参考図書	今井邦彦『語用論への招待』（大修館書店, 2001） ISBN: 978-4469212648 2,200 円+税
履修上のポイント	教材を通して、語用論の基本的な概念を理解し、その第二言語習得における応用性について理解する。また、教育現場への応用、教科書への応用等も学ぶことになる。前期の取り組みは後期のレポート作成の準備となるように基礎を築くとともに、興味のある話題の論文を探し始めることを希望する。
レポート課題 1	①次の語用論の各基本概念を自分の言葉でまとめなさい：1.「発語内行為（illocutionary act）と発語媒介行為（perlocutionary act）」2.「グライスの協調の原理（cooperative principle）と会話の格率（conversational maxims）」（1,500 字程度。参考にした文献のリストを付けること。） ②教材の第 I 部（第 1 章～第 5 章）を読み、著者の説明や主張の要点理解し、自分の言葉で説明しなさい。（3,000～4,000 字） <b>留意点</b> ：特定の研究について言及する時に元の例文が必要になる場合を除き、説明のための例文は自分が作ったものを含めること。
レポート課題 2	教材の第 II～III 部（第 6 章～第 12 章）を理解したうえで、扱われている内容に関連する研究論文の一つを選び（CiNii で検索可）、その主張の要点を自分の言葉で紹介しつつ、自らの批判や反論を提示し、さらに改善案を説明しなさい。（3,000～4,000 字） <b>留意点</b> ：研究論文は学会誌、大学・研究機関の紀要、等に掲載されている論文で 10 ページ程度のものを選ぶこと。扱う論文がインターネットで公開されていない場合には、PDF 化してレポートとともに提出すること。論文の選択に不安がある場合は担当教員に相談すること。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 清水 崇文 教材名： 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』（スリーエーネットワーク, 2009） ISBN:978-4-88-319513-8 2,000 円+税
	本書は「語用論」の諸側面に焦点を当て、中間言語語用論の様々な研究によってこれまで明らかにされてきた成果を整理している。実際に言葉を使う状況や場面、相手との人間関係などに照らして適切な言い方を用いる能力に関する「中間言語語用論」について研究成果をまとめ、さらに教育への応用の仕方を提示している。
参考図書	今井邦彦『言語理論としての語用論』（開拓社, 2015） ISBN: 978-4758925501 1,900 円+税
履修上のポイント	前期の知識を基に、中間言語語用論で用いられる研究方法、特にデータ収集の方法や異文化間語用論、理解と産出の両側面から学習者の語用論的知識の使用、語用論的能力の習得・発達、等について学ぶが、レポートは基本を押さえた上での分析が必要になるので、応用を意識しながら教材から学ぶことが肝要である。
レポート課題 1	前期の教材を基礎に、後期の教材である清水(2009)を理解したうえで、第二言語学習者のための語学の教科書を選び、語用論の成果を生かした具体的な改善案を提案しなさい。（3,000～4,000 字） <b>留意点</b> ：分析対象の教科書は日本語学習か英語学習用とする。分析対象のページ数が多くなければ、PDF 化したものも提出すること。
レポート課題 2	基本教材 2 が扱うテーマに関連する研究論文を選び（CiNii で検索可）、その主張の要点を自分の言葉で紹介しつつ、自らの批判や反論を提示し、改善案を説明しなさい。（3,000～4,000 字） <b>留意点</b> ：研究論文は学会誌、大学・研究機関の紀要、等に掲載されている論文で 10 ページ程度のものを選ぶこと。扱う論文がインターネットで公開されていない場合には、PDF 化してレポートとともに提出すること。論文の選択に不安がある場合は担当教員に相談すること。